

Title	二回目の成人式 : 回想録
Author(s)	田中, 四郎
Citation	大阪外国語大学論集. 4 p.213-p.220
Issue Date	1990-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79520
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

二 回 目 の 成 人 式 — 回 想 録 —

田 中 四 郎

Celebrating the Second Coming of Age
— Reminiscences —

Shiro TANAKA

0. はじめに

この回想録は、大阪外国語大学の「留学生友の会」という学生のサークル・(アクト) の顧問になった際に、学生のインタビューに答えたものに手を加えて書き直したものである。人は誰でも、自分の少年少女の頃のことは良く覚えているものである。例えば、初めて小学校に行った日のこととか、中学校での部活に一生懸命になっていた頃のこと、あるいは高校時代の恋の悩みとか、学生時代の親友との交遊関係等である。このような大切な思い出が、人生の10代や20代の中に織り込まれているのである。しかし、多くの人たちはそんな素晴らしい思い出を忘れたかのように、日常の社会生活に追われながら毎日を過ごしているのではないだろうか。そして、ふっと気がついてみると、もう結婚はしているし、何人かの子供にも恵まれていたりするものである。そんなある日、自分の歳をじっくりと数えてみると、もう40才になっているというのが現実ではないだろうか。つまり、40才という年令は、日本の社会で成人として扱われる20才を二回迎えた年令になるのである。人によっては、これはまさに驚きでありショックでもある。近年の日本は、世界一の長寿国といわれる国になったが、80才まで生き延びるのはそれ程たやすいことではないような気がする。したがって、この当たりで、もう一度自分の人生を振り返ってみて、どのような生き方をしてきたのか、あるいはどのような人生観を築きあげてきたのかを、じっくりと考えてみるのも悪くはない年令になったのではないかと思う。そんな訳で、自分の半生を振り返りながら思うがままに書き綴ることにした。

1. 生い立ち

私は、東京は北区の東十条の町で、昭和23年6月14日に誕生し、この世に生を受けることになった。その頃の東京は、終戦後の後始末に一段落がつき、村や町の人々の顔にも笑顔が戻ってきた頃である。また、戦地で生き延びた兵隊さんたちがつぎつぎと本国に帰ってきたこともあり、日本のいたるところで赤子の泣き声が聞こえはじめるようになった。その赤子の泣き声は、その頃の国民にとっては、あたかも日本の将来の繁栄を期待するファンファーレのごとく聞こえたのかもしれない。そんな訳で、その頃の親たちにとっては、辛くとも力強く華やかな時代の幕開けであったのかもしれない。したがって、その頃の私たちのことを、日本の将来を担う第一次ベビーブームの申し子と呼んでいたようである。そんな訳で、小学校も一年生の頃から6クラス程あったので、誰が何処にいるのか良く分からないほどの子供たちが校庭で遊んでいた。その頃の東京の道路は、まだ舗装されていないところが沢山あった。家庭での便所も汲み取り式だったので、小学校の低学年の頃までは、市役所の人が肥え桶を荷馬車で引いていたのを覚えている。したがって、荷馬車が通り過ぎた後には、必ず幾つかの馬糞が道路に落ちていたものである。私の家の近くには、空襲の時の焼け跡が残っていたので、そこへよく蜥蜴や昆虫を取りに行ったものである。そこにはまた、沢山の瓦が残されていたので、その瓦の破片を空手選手の真似をして割ったりして、近所の子供たちと腕比べをして遊んだものである。その頃の子供たちの間では、何時の間にかリーダーが決まり、いつもその子の掛け声で仲間が集まり、色々な遊びが始まったものである。しかし、その頃の子供の遊びには、まだ電動式の玩具は数が少なかったもので、遊び道具はもっぱらビー玉やベューゴマあるいはメンコのたぐいであった。また、近所の空き地を利用して三角ベース・ボールなどをして遊んだものである。その頃の子供たちの遊び仲間の年齢層は、小学校にも行っていない子供から小学校の上級生までであり、自然に縦割りの集団が出来上がっていた。したがって、その頃の子供たちは、このような子供の社会での関わりを通して、人間にとって大切な協力や協調というものを学んでいたのではないかと思う。三角ベース・ボールの遊びにしても、年齢差のある10人の子供たちが集まれば、そのグループのリーダーによってチームが平等になるように分けられてゲームが始まったものである。ゲームのルールもみんなが楽しくできるようにするために、ゲームの途中でもよく変えられたものである。例えば、小学校の低学年の子供には上からでなく下からボールを投げて打ち安くしてやったり、またそれでも打てないような子供がいると、外野の方から転がせという声がかかり、ピッチャーはその通り下からボールを転がしてやったものである。

2. 生命の尊さ

私には残念ながら姉や妹はいないが、幸いにも兄が3人いる。上の2人は戦前の生れというこ

ともあって、私とは歳が7つほど離れている。したがって、3人目の兄と私は戦後父が戦地から帰って来てからの子供になる訳である。戦時中の兄たちは、母と共に長野県の親類の家に疎開していたので、きっとその頃の野山を駆け回っていたのだと思う。終戦後間もなく、多くの兵隊さんたちが戦地から帰ってきたのだが、その多くの人たちは何らかの形で命拾いをしたお陰で、生き延びて本国に帰ってくることができたのだと思う。私たちの父もそのような兵隊さんたちの一人であった。そんな父から聞いた話になるが、出征した父は、1,500人程乗せた船で南方の島、セレベス島に向かって航海をしていたそうである。その船に乗っていた父は、船内と甲板の寝床を戦友と交替しながら寝苦しい夜を過ごしていた。そんな静寂な夜を敵方の魚雷は、一瞬にして悲惨な地獄の夜に化してしまったのである。父は運よくその晩は甲板にいたので助かったが、父の戦友は不運にもその爆発によって海の藻屑と化してしまったのである。父はその晩の出来事を次のように語ってくれた。乗っていた船に魚雷を受けた瞬間ドーンと爆音が鳴り響き、大きな火柱が甲板から花火のように吹き上げた。その後は、サイレントと悲鳴が入り乱れ、船はあっという間に海中に沈んでしまった。とにかく海に飛び込んだ父は、一命を取り留めたものの、その後三日三晩飲まず食わずの状態で海洋を漂わなければならなかった。また、息絶えた戦友たちが海中に沈んでいくのを見届けた時の父は、生きた心地がしなかったであろう。しかし、本国の家族のことを思いながら必死に頑張ったとのことである。そして、父の運は再び巡ってきたのである。というのは、後半日も保たなかった父の前に本国からの輸送船が通りかかったのである。このような運命的な出来事があったお陰で、私と一つ年上の兄はこの世に生を受けるチャンスを頂いた事になる。

3. 体操競技との出会い

私たちの小学生時代の一番の人気スポーツといえば、野球しかなかった。ちょっと大袈裟に聞こえるかもしれないが、その頃の子供だったら誰でも一度はプロ野球の選手になりたいと夢を描いたに違いない。私もその頃は、日曜日になるとクラスや近所の仲間と近くのグラウンドに行ったものである。そんな訳で、中学校に入学したら必ず野球部に入部しようと心に決めていた。しかし、そんな私の心に異変が起こったのである。中学校の入学式が終わり、家に帰ろうと校庭を歩いていたら、その中学校の体操部の部員たちが校庭の片隅で練習を開始していたのである。その部員の中の一人の生徒が、高鉄棒で前方へ後方へと大きな回転をしていたのである。このような技は、その頃のオリンピック選手であった竹本選手や小野選手らが、テレビの中でやっているのを何度か見たことがあったが、実際に目の前で、それも自分と同じような年齢の子供がやっているのを見たのはその時が初めてであった。その時の一瞬の感動が私の心を変えてしまったのである。私に感動を与えてくれたその生徒は、後に日本の代表選手にもなり、世界にその名を残すほどの大選手になった。しかし今になって思うが、彼との出会いがなかったなら、私の人生は大

きく変わっていたに違いないと確信する。そんな私は、彼を追って同じ高校に入学することになった。そこでの思い出はというと、やはり高校三年生の時である。全国高等学校総合体育大会・体操競技選手権大会の前には、関東大会とその出場予選のための東京都大会があった。しかし、私は、その試合の数週間前に右手首を痛めていたので、思うように練習ができなくて苦しんでいた。そんな状態だったので、体操部の主将でありながら、みんなをまとめることもできずに一人苦しんでいたのであった。そしてその大事な試合での結末は、私たちのチームが団体総合で2位になり、個人総合では私が第5位という結果になってしまった。本来ならこれで団体のインターハイ出場の夢は断たれるのであるが、幸運にも私たちの高校は前年度の優勝校だったので、推薦校として全国大会への出場が約束されていた。そして、翌日の練習日のことである。私たち三年生は、昨日の試合の反省会も兼ねて食堂で話し込んでいたこともあり、体育館に行くのが何時もよりも少し遅れてしまったのである。すると私たちの恩師は、この日に限って早々と何時もの椅子に座っていたのであった。私たちは、一瞬「アッ！」とそのときに思ったが、もうすでに遅く恩師の声がとんだ。「お前ら、そこに並べ!」。私たちは言われるように並んだとたんに、恩師に「お前はキャプテンなのにそんなことでどうする!」といわれると同時に、「バシッ!」と一発たたかれた。結局たたかれたのは私一人だったのであるが、その一発で私は、自分が自己中心的でチームのことなど考えていないことに気が付いたのである。すると、そんな私の心の中のもう一人の私が「自分がチームを引っ張っていかなければならないんだ」と囁いている自分を自覚することができたのである。そして、その後のチームワークのお陰で、私たちのチームは全国大会で見事団体総合優勝を成し遂げることができたのである。おまけに、私自身も0.3という僅差ではあったが個人総合優勝をすることができたのであった。それはまさに夢が実現したように嬉しい出来事であった。私はあの時に出てきた心の中のもう一人の自分に対し無言のうちに感謝していたように記憶する。今にして思うが、若い頃のこうした思い出は、一生の心の宝物だと思い大事にしている。

4. カナダへの留学

さて、話は大学時代になるが、学生時代の恩師や学友との関わりに関する思い出は沢山あるが、ここでは私のカナダへの留学がどのようにして可能になったのかについて述べてみることにする。カナダへの留学の機会をつかんだのは、まさに偶然のチャンス、そして恩師や両親の協力と理解があったからこそのことである。その頃の学生が、海外留学をするということはそれ程たやすい事ではなかった。そんな時に、大学の恩師から体操競技のコーチとしてポルトガルに行かないかという話があったが、残念ながらその話は父の反対で断念することになってしまった。しかし好運なことに、今度はカナダ行きの話が私のところにきたのである。なぜ好運だったかというと、この旅行にはその年の世界体操選手権大会に出場していたチームの男女一名の選手と恩師の三人

で行くことになっていたのだが、不運にもその女子の選手が試合中に膝の靱帯を切断してしまったので、私が彼女の替わりにこのカナダ遠征に参加するようになったからである。恩師は現地に入ってからすぐにアルバータ大学の教授に私の助手としての採用の件について話を進めていたのであった。そんな訳で、1971年から1973年の2年間その大学のアシスタント・コーチとして採用されることになったのである。その後、カルガリー大学・体育学部の講師及び体操競技部のコーチとして迎えられ、そこで1973年から1981年の間お世話になることになった。私はこのようにしてカナダに10年間生活することになったのだが、そこでの留学経験は私にとって生涯忘れることのない思い出になった。年令でいうと23才から33才という、若い私にとって一番大切な時期にこのような機会に恵まれたことは、誠に幸運なことであったと思う。

5. 帰国そして就職問題

カナダ留学の5年目頃からは、東京の父の病気見舞いのために年に一回の割合で帰国していたが、残念ながら父は私の留学8年目の時に他界してしまった。今にして考えてみても、父があのかポルトガル行きに反対し、カナダ行きに賛成してくれたからこそ今の自分があるのだとつくづく人生の不可思議というものを感じずにはいられない。また、父親の生命力と幸運があったからこそ、私はこの世に生命を宿すことができたのである。また、父母や恩師の私に対する深い愛情と思いやりがあったからからこそ、カナダに行くこともできたし、無事に生活をすることができたのだと思う。私が帰国する際には、すでに東北の某国立大学の就職が内定していたのだが、母校への就職の話がもち上がったので、家族会議をしたりして、東京に残ることにした。しかし、母校の学長が替わり学内の体制に変化がおこり、結局私の希望していた母校への就職は断たれてしまったのである。それもこれも私への試練として受け止めることにして、東京で頑張ることにした。この時私は、自分の人生もまた一から振り出しに戻ったのかとさえ思えた。しかしその後は、恩師や友人たちのお陰で二つの大学の非常勤講師と二つのスポーツ・スクールでのアルバイトの仕事が決まり、生活にはさほど支障がない程度に生活することができた。また、日本体操協会の国際部の役員として数カ国の海外遠征に参加させてもらうこともできた。それから5年後の1986年の8月頃に、母校の恩師より大阪外国語大学の公募についての話を聞くことになった。可能性は五分五分だが、一つ当たって見たらどうだということで、履歴書や資料を揃えて応募することになった。競争率は意外に高かったが、ありがたいことに運命の女神は私に輝き、めでたく1986年11月16日付けを以て採用という運びになった。

6. 私の人生観

人間40才になったら、自分の顔に責任を持たなければならないと、世間ではいわれているが、

それには何らかの根拠があるに違いない。日本では20才を以て成人とすると法律で定められている。したがって、40才ともなれば、成人といわれてから20年の歳月が流れているので、二回目の成人式を迎えたということにもなる。そこで今回はこのような半生記（反省記）の回想録なるものを試みた訳である。私の人生観は、「人生鏡の如し」といった原理なのである。「人」というのは、書いて字のごとくお互いに持ちつ持たれつの関係なので、お互いに助け合っていかなければならない。つまり、「人を立てる」ということなのである。そのためには、相手を立てて、自分が下がらなければならないのである。そうすることによって、相手も自分も生かすことができるのである。つまり「人生とは、人を生かすなり」と私はみているのである。私たちは常に、誰かを支え誰かに支えられて生きている訳である。その人と人之间には、「間」というものがあるので、私たちは自分たちのことを「人間」といつているのではないだろうか。この「間」を辞書でしらべて見ると「かかわり」という意味が書いてある。ということは「間」というものを自分の鏡として見るのが大切になる訳である。つまり、自分と関わりのある人や現象を通して自分の心の在り方を検証することが大切なのである。例えば、誰かにいやなことを言われても、それは自分の足りない所をその人が教えてくれているのだと受け取らせてもらうのである。そのように受け止めることができれば、どんなに嫌なことを言われてもされても、相手を責めてはいけないという気持ちになれるものである。しかしながら、このことを実行するとなるとなかなか難しいのである。私も自分の気になることを言われたり反対のことを言われたりすると、つい腹が立ちその人を責めてしまう。そこで大切になるのが、もう一人の自分である。もう一人の自分が「あっ！いけない、また相手を責めてしまった」と反省することなのである。それができたときには、不思議と気分が楽になるのである。このように「鏡の原理」とは、「人間教育」のことを意味していることになるのではないだろうか。このようなことを繰り返すことによって、人間は少しずつ向上していくのではないかと思う。人類の歴史は、「食の時代」から「物の時代」になり、そして「金の時代」に移り、現代は「情報の時代」になったと言われるようになったが、その昔から大切にされてきた何かが忘れられつつあるのではないだろうか。それは言うまでもなく「人間の心」である。今までの日本は、先進国に追いつけ、追い越せの精神でやってきた。その結果、日本はとうとう世界一の経済大国になってしまったのである。しかし、これからの日本は自国のためだけの政治経済の在り方では、世界の仲間から嫌われてしまうことになる。もう既にそのような傾向がいたるところに現われだしてきているのが現状である。したがって、これからは相手国に喜んでもらえるような外交政策や異文化交流のしかたを考える必要がある時期に来ているのではないだろうか。つまり、これからの日本人に必要なものは「心の転換」や「感の切り替え」といったものであるような気がする。近年の日本ほど、世界に大きな影響を与えた時代はなかったといっても決して過言ではない。そんな訳で、最近の日本は、「国際化」「国際人」「国際交流」と騒がれているのである。そういう意味において、今一度「人間教育」というものを見なおす必要があるのではないだろうか。私の人生観には「いい加減の原理」と言うものもある

る。一般に使われている「いい加減」の意味は「だらしない」とか「どっちつかず」とか「チャランポラン」といった具合に悪い意味に使われているが、私の言う「いい加減」とは「好い・善い・良い加減」で、プラスの思考形態を取るのである。分かりやすい例で言うと、次のようになる。「湯加減」を見るとき、Aさんは、「今日の湯はいい加減だ」と言うかもしれないし、Bさんは「今日の湯は熱い」と言うかもしれないし、Cさんは「今日の湯はぬるい」と言うかもしれないということで、同じ温度の湯でも人によって感じ方が違うということなのである。人間関係もそうで、何かを決める時には「Aという理論」もあるし、「Bという理論」もあるし「Cという理論」もあり得るのである。それなのに「自分が絶対正しい」と言い張っていたのでは、融通がきかなくなってしまうのである。したがって、自分の湯加減を変えられるような考えを持たなければ、いつになっても相手の人は自分を受け入れてくれないであろう。裏返して言うならば、もし、自分の湯加減を変えなくても、相手の人が入ってきてくれたのなら、それは相手の人が湯加減を変えてくれたのだということになる。もし相手の人との話し合いがつかなかったら、相手の人が自分の湯加減をどのように感じているのかを、いま一度チェックしてみたほうが良い。つまり、お互いの湯に必要なのは、熱い湯なのか、それとも冷水なのかを確認しあわなければならない訳である。すなわち、自分の湯加減を変えるためには相手の人の意見が必要になり、相手の湯加減を変えてもらうには自分の意見を聞いてもらわなければならないことになる。つまり、二人の人間がお互いに満足するようなコミュニケーションをするためには、相互理解というものが必要になってくる訳である。

7. おわりに

二年ほど前、ある文化会館で留学生問題や国際交流に関する「国際シンポジウム」なるものが開かれたので、行ってみることにした。そこでは、何人かの留学生や帰国子女によるパネルディスカッションが行われていた。しばらくすると会場の人から帰国子女の方に次のような質問がだされた。「貴方にとって、国際交流や異文化交流で一番大切なことは何ですか」とするとその帰国子女は、たいへん興味深い答え方をしていた。「スポンジになることだと思う」つまり、スポンジのように色々な文化を吸収して混ぜ合わせて絞り出すことである。スポンジはまた、色々な形に変化しやすいので、一つの形にこだわることがないと言う意味のことであった。私はこの話を聞いて素晴らしいと思わずにはいられなかった。私たち人間は、それぞれの時代（時間）と場所（空間）の中で生きてきたのだが、どうしてもその「枠」の中での物の考え方や見方ですべてのことを判断しがちである。したがって、これからの日本人はそれだけでは駄目で、これからもっと海外からの人たちと触れ合う中で吸収し合っていかなければならないと思う。裏返して言うならば、もし他の人の考えや意見を拒んで、自分の意見に執着していたのでは排他的な人間になってしまう訳である。そういう人は、もうスポンジではなく石になっているので、上から水が

落ちてきてもポチャポチャとはねかえるだけである。スポンジになれば、自分の姿勢いかんによっていくらかでも吸収することができ、膨れ上がることができる訳である。したがって、21世紀へ向かう「ニッポン人」が真の国際人になるためには、「スポンジ」のような人間になればいい訳である。そのためには、私たち日本人が今後の国際社会をグローバルに考えて、ローカルに行動していく必要があるといえよう。そのことが、近年の日本に与えられた課題ではないだろうか。そういう意味で、一回目の成人式を迎えた若い人も、二回目の成人式を迎えた中年の人も、あるいは三回・四回目の成人式を迎えた初老の人たちも一緒になって考えなければならない時代に入ったといっても決して過言ではないと思う。21世紀まで残すところ10年足らずとなったが、今日の日本は、この残された20世紀末期の時代に、日本人が世界平和に貢献するために何をしなければならないかが、問われているような気がする。

(1990. 8. 2 受理)